

はじめに

古代・中世移行期：10～12世紀の合戦と戦士に関する文献史料

- ・戦闘の実態に言及した文書・記録は皆無に近い
  - 説話集・軍記物語などの文学資料、前九年合戦絵詞などの絵画作品に依拠
- ・エリート戦士身分＝「兵」・武士：弓射騎兵（6世紀からの伝統の継承）
  - cf. 14世紀に打物騎兵（鉾・刀剣などの打撃具）への実質的移行
  - ただし弓射騎兵と弓射歩兵・打物歩兵（戦士だが兵・武士か否かは諸説）とは混在
  - 『将門記』では騎兵＝兵、それ以外を「歩兵」「兵士」として区別
  - ↳戦闘形態：軍旗と鉦（鼓）の使用＝古代的要素と焼討戦術＝10世紀の要素の混在
    - cf. 敵の掃討・殲滅（平安末期）or 戦闘を通じた領地の争奪（戦国期）

## 1. 対陣方式の戦闘形態

『将門記』にみえる対陣の場合の陣形と戦闘

(1)置楯を並べ、(2)後ろに歩兵を配置、(3)騎兵が控える

⇒歩兵の戦闘（射組）から弓射騎兵の戦闘（馳射） さらに組討ち（頸を取る）も

『今昔物語集』巻二十五「源充と平良文と合戦せる語 第三」

(前略) 既に其契の日に成ぬれば、各軍を発して、此く云ふ野に、巳の時許に打立ぬ、各五六百人許の軍有り、(中略) 一町計を隔て、楯を突き渡したり、各兵を出して牒を通はす、其兵の返る時に、定れる事にて箭を射懸けるなり、其れに、馬をも不□□ず、不見返して静に返を以て猛き事にはしける也、然て其後に各楯を寄せて、今は射組なむと為す程に、良文が方より充が方に云はする様、「今日の合戦は、各軍を以て射組せば、其の興不侍ら。只君と我れとが各の手品を知らむと也、然らば、方々の軍を不令射組して、只二人走らせ合て手の限り射と思ふは何が思す」と、充此れを聞て、「我れも然思給ふる事也、速に罷り出ず」と云せて、充楯を離て只一騎出来て、雁膀を番て立てり、良文も此り返事を聞て喜て郎等を止めて云く、「只我れ一人、手の限り射組まむと為る也、尊達、只任せて見よ、然て我被射落なば、其時に取て可葬き也」と云て、楯の内より只一騎歩かし出ぬ、

然て雁膀を番て走らせ合ぬ、互に先づ射させつ、次の箭に慥に射取らむと思て、各の弓を引て箭を放つて馳せ違ふ、各走せ過ぬれば、亦各馬を取て返す、亦弓を引て箭を不放して馳せ違ふ、各走せ過ぬれば亦馬を取て返す、亦弓を引て押宛つ、(中略) 良文、充に云く、「互に射る所の箭皆□共に非ず、悉く最も中を射る箭也。然れば共に手品は皆見へぬ。弊き事無し。而るに此れ昔よりの伝はり敵にも非ず。今は此て止なむ。(中略)」と。充此れを聞て云く、「我も然なむ思ふ。実に互に手品は見つ。止なむ。吉き事也。然は引て返なむ」と云て、各軍を引て去ぬ。(後略)

※古代・中世移行期の典型的な戦闘形態を示す。一騎討ちはイレギュラーな戦闘方式。

『前九年合戦絵詞』第三段

(前略) 或年の九月九日に、貞任五百余騎の夷賊を相具て、出来て、陣牒の使をたてたり、  
詞云、今日はことに菊酒を酌て、興宴をいたすべき日也、君は当国の刺史也、貞任等は其  
の中の黔首也、節供を進ぜしめんがために参向するところ也と、後藤内則明ら、其返事に  
云、汝達、節供を進ぜしむべきよし聞食は、兼日に飲失べき支度あり、早々に持参ずべき  
也と、其時貞任・宗任・良昭等悦て鼓をうち軍呼して襲来る、御方同く鼓をうち、時をつ  
くり、寄向て合戦す、巳時より箭合、酉時に至て乱入、剣を合て合戦すれども、勝負なし、  
貞任が方に死者百余人、疵を被者九十余人、御方に死者八十余人、疵を被者六十余人也、  
※鼓(軍鼓・戦鼓)の使用(軍呼)、箭合わせ→刀剣も使用した戦闘 …馳射の描写なし

## 2. 敵地襲撃方式の戦闘

『将門記』:「營所」などの焼討戦術=10世紀の特徴づけ

『今昔物語集』卷二十五「平維茂、藤原諸任を罰ちため語 第五」

(前略) 十月の朔比の程に、丑時計に、前に大きな池の有るに居たる水鳥の俄に噪しく立  
つ音のしければ、余五驚て、郎等共を呼て、「軍の来たるにこそ有ぬれ、鳥の痛く騒ぐは、  
男共起て調度負へ、馬共に鞍置け、櫓に人登れ」など俸て、郎等一人を馬乗せて、「馳向  
て見て来」と遣つ、即ち返り来て云く、「此の南の野に□幾許とは否不見給ば、軍真黒  
に打散て四五町計に見へ候つ」と、余五此を聞て、「此許被壓ぬれば今は限なめり、然ど  
も一切れ支て可戦き也」と云て、軍の寄り可来き道々に、各四五騎計、櫓を突て待懸けさ  
す、凡そ家の内に調度負たる者、上下を不論、二十人に不過ぎ、(中略)妻、女房ども少々、  
子の児などを、後の山に隠し遣りつ、(中略)

然て、余五心安くて走り廻つゝ行ふに、軍共家近く壓来て、廻るに打衛て戦ふ、此れを  
抑ふと云へども、人少くして力無し、屋共に火を付て焼き掃ふ、適に出る者をば員を尽し  
て射れば、内に籠て蠢く、(中略)

然て余五は、彼の家の内にして、明まで走り廻つゝ行ふ程に、敵の方の人をも多く射さ  
せ、今は箭も尽たり、人の員も極て少なければ、「戦ふとも益不有」と思て、(中略)太刀  
計を懐に持て、煙の薰り合たる中より搔交れて飛が如くに出て、西の流の深に落入て、澳  
中に葦などの生滋たる所に構て搔寄ぬ、臥揚の有る根を拘へて有、(中略)

然れば、(中略)余五出立とて云く、「(中略)命惜からむ者は速に可留し」と云て、(中  
略) 軍の員を計ふれば、馬の兵七十余人、歩兵三十余人、合て百余人ぞ集れる、此れは家  
近き者共の疾く聞て馳せ集れるなるべし、家遠き者共は未聞ねば、遅く来なるべし、(後  
略)

※背後に「山」と周囲に「流」「池」をもち「櫓」のある「家」「屋」の焼討戦術

・前提に「家」と接続する「道々」=交通路の遮断

・『将門記』から抽出される「従類」と「伴類」の区別に類似の軍事編成

◎12世紀末における「山」の「城郭」と戦闘

当該期の史料に「城郭」とあっても戦国期以降の城を想定してはいけない

堀・逆茂木・搔楯＝交通遮断施設が「城郭」の本質的機能⇒「疋夫」の動員

→馬の習性をふまえた騎馬の侵入を防ぐ目的：牧の「二重堀」などを応用

『平家物語』の「城郭」描写：

—堀や逆茂木の後方に高く足場（高矢倉）を構築して迫りくる軍勢に矢を射かける

『吾妻鏡』治承4年（1180）8月26日条：相模国衣笠城

武蔵国畠山次郎重忠、且為報平氏重恩、且為雪由比浦合稽、欲襲三浦之輩、仍相具当国党々、可来会之由、触遣河越太郎重頼、是重頼於秩父家、雖為次男流、相継家督、依從彼党等、及此儀云々、江戸太郎重長同与之、今日卯尅、此事風聞于三浦之間、一族悉以引籠于当所衣笠城、各張陣、東木戸口〈大手〉次郎義澄・十郎義連、西木戸和田太郎義盛・金田大夫頼次、中陣長江太郎義景・大多和三郎義久等也、（後略）

『吾妻鏡』治承4年（1180）11月2日条：常陸国金砂城

武衛着常陸国府給、佐竹者、權威及境外、郎從満国中、然者、莫楚忽之儀、熟有計策、可被加誅罰之由、常胤・広常・義澄・実平已下宿老之類、凝群議、先為度彼輩之存案、以縁者、遣上総権介広常、被案内之処、太郎義政者、申即可参之由、冠者秀義者、其從兵軼於義政、亦父四郎隆義在平家方、旁有思慮、無左右称不可参上、引込于当国金砂城、然而義政者、依広常誘引、参于大矢橋辺之間、武衛退件家人等於外、招其主一人於橋中央、令広常誅之、太速也、從軍或傾首歸伏、或戰足逃走、其後為攻撃秀義、被遣軍兵、（中略）相率数千強兵競至、佐竹冠者於金砂、築城壁固要害、兼以備防戰之儀、敢不搖心、動干戈、発矢石、彼城郭者、構高山頂也、御方軍兵者、進於麓溪谷、故両方在所、已如天地、然間、自城飛来矢石、多以中御方壯士、自御方所射之矢者、太難覃于山岳之上、又巖石塞路、人馬共失行歩、因茲、軍士徒費心府、迷兵法、雖然、不能退去、愁以挟箭相覷之間、日既入西、月又出東云々、

『吾妻鏡』治承4年(1180)11月6日条

丑刻、広常、入秀義逃亡之跡、焼払城壁、其後分遣軍兵等於方々道路、搜求秀義主之処、入深山、赴奥州花園城之由、風聞云々。

『吾妻鏡』文治5年（1189）8月7日条：陸奥国阿津賀志山

二品着御于陸奥国伊達郡阿津賀志山辺国見駅、而及半更雷鳴、御旅館有霹靂、上下成恐怖之思云々、泰衡日来聞二品発向給事、於阿津賀志山、築城壁固要害、国見宿与彼山之中間、俄構口五丈堀、堰入逢隈河流柵、以異母兄西木戸太郎国衡為大將軍、差副金剛別当秀綱、其子下須房太郎秀方已下二万騎軍兵、凡山内三十里之間、健士充滿、加之於苅田郡、又構城郭、名取・広瀬両河引大繩柵、泰衡者陣于国分原、鞭楯、亦栗原、三迫、黒岩口、一野辺、以若九郎大夫、余平六已下郎從為大將軍、差置数千勇士、又遣田河太郎行文・秋田三

郎致文、警固出羽国云々、入夜、明曉可攻撃泰衡先陣之由、二品内々被仰合于老軍等、仍重忠召所相具之疋夫八十人、以用意鋤歛、令運土石、塞件堀、敢不可有人馬之煩、思慮已通神歟、(後略)

『吾妻鏡』文治5年(1189)8月8日条

金剛別当季(秀)綱率数千騎、陣于阿津賀志山前、卯刻、二品先試遣畠山次郎重忠・小山七郎朝光・加藤次景廉・工藤小次郎行光・同三郎祐光等、始箭合、秀綱等雖相防之、大軍襲重、攻責之間、及巳刻賊徒退散、秀綱馳歸于大木戸、告合戰敗北之由於大將軍国衡、仍弥廻計略云々、又泰衡郎從信夫佐藤庄司(又号湯庄司、是繼信忠信等父也)相具叔父河辺太郎高経・伊賀良目七郎高重等、陣于石那坂之上、堀惶懸入逢隈河水於其中、引柵、張石弓、相待討手、(後略)

『吾妻鏡』建仁1年(1201)5月14日条：越後国鳥坂城

晴、佐々木三郎兵衛尉盛綱入道使者参着、捧一封状、義盛持参御所、善信・行光於御前讀申之、其状云、日来、城小太郎資盛欲奉謀朝憲、構城郭於越後国鳥坂、近国之際、存忠直之輩、愁雖来襲、還悉以敗北、爰西念可発向之由奉嚴命、件御教書、去月五日到着于西念之住所上野国磯部郷、仍不廻時尅揚鞭、三ケ日之中、馳下鳥坂口、則遣使者於資盛、相触御教書之趣問、答早可来城辺之由、因茲発勇士等、于時越後・佐渡・信濃三ケ国輩争鋒競集、西念息子小三郎兵衛尉盛季欲先登之処、信濃国住人海野小太郎幸氏拔於盛季之右方、欲進出、爰盛季郎從取幸氏騎轡、此間、盛季如思進先登射一箭、其後幸氏又進寄、相戰之間被疵、資盛已下賊徒飛矢石不異雨脚、合戰之間、彼及兩時、盛季被疵、郎從等數輩、或損命、或被疵、又有資盛之姨母之、号之坂額御前、雖為女性之身、百発百中之芸殆越父兄也、人举謂奇特、此合戰之日、殊施兵略、如童形令上髮、着腹卷、居矢倉之上射襲致之輩、中之者莫不死、西念郎從又多以為之被誅、于時信濃国住人藤沢四郎清親廻城後山、自高所能窺見之発矢、其矢射通件女左右股、即倒之処、清親郎等生虜、疵及平喻者、可召進之、姨母被疵之後、資盛敗北、出羽城介繁成(資盛曩祖)自野干于之手所相伝之刀、今度合戰之刻、紛失云々、

※「山」の地形を利用しながら「城壁」(焼払の対象→木製?)を作り「櫓」「矢倉」を設置  
・周囲を「堀」「惶」と「柵」で囲み陸路にあわせて「木戸」の設置←攻防の対象  
・「城郭」からは「矢石」による攻撃⇒最終的には焼討戦術も踏襲

ただし周囲の「山」には必ずしも「城壁」「堀」「柵」などの防衛施設は構築されず

『陸奥話記』：康平5年(1062)9月の厨川柵での戦闘 →「兵糧攻め」との評価も

(前略)同十四日向厨川柵、十五日酉刻到着。圍厨川・姫戸二柵、相去七八町許也。結陣張翼、終夜守之。件柵西北大澤、二面阻河。河岸三丈有余、壁立無途。其内築柵自固。柵上構楼櫓、銳卒居之。河與柵間亦堀隍、隍底倒立刃、地上蒔鐵、又遠者発弩射之、近者投石内之。適到柵下者、建扨湯沃之。(中略)十七日未時、將軍命士卒曰、各入村落壞運舍屋、填之城隍、亦每人蒔萱草、積之河岸。於是攘運蒨積、須與如山。(後略)

### 3. 金沢城（柵）をめぐる戦闘の描写

『奥州後三年記』上

金澤の柵といふ所あり。それはこれにはまさりたる所なりといひて、二人相具して沼柵をすててかなぎはにうつりぬ。將軍の舎弟左兵衛尉切義光、おもはざるに陣に來れり。將軍にむかひていはく、(中略) 前陣の軍すでにせめよりてたたかふ。城中よばひ振て矢の下る事雨のごとし。將軍のつはもの疵をかうぶるものはなはだし。(中略) ちからをつくしてせめたたかふといへども、城おつべきやうなし。岸たかくして壁のそばだてるがごとし。遠きものをば矢をもつてこれを射、近きものをば石弓をはづして是ををうつ。死するもの数をしらず。伴次郎兼仗助兼といふ者あり。きはなきつはものなり。つねに軍の先にたつ。將軍これをかんにて薄金といふ鎧をなんきせたりける。岸ちかくせめよせたりけるを、石弓をはづしかけたりけるに、すでにあたりなんとしたりけるを、首をふりて身をたはめたりければ、かぶとばかりをうちおとされにけり。(後略)

『奥州後三年記』中

吉彦秀武將軍に申やう、城の中かたくまもりて御方の軍すでになづみ侍にけり。そこばくのちからをつくすともやくあるまじ。しかじたたかひをとどめてただまきてまもりおとさん。糧食つきなば、さだめてをのづからおちなんといふ。軍をまきて陣をはりてたてをまく。二方は將軍これをまく。一方は義光これをまく。一はうは清衡・重宗これをまく。かくて日数ををくるほどに、武衡がもとに龜次・并次と云二人の打手あり。ならびなきつはものなり。是をこはうちと名付たり。武衡、使を將軍の陣へつかはして消息していはく、たたかひやめられて徒然かきりなし。龜次といふこはうちなん侍る。めして御覽ずべし。そなたよりもしかるべき撃手一人出してめしあわせ、たがひに徒然をなぐさめられ侍るべきかといひをくれり。(中略) 龜次が長刀のさきしきりにあがるやうにみゆるほどに、龜次兜きながら鬼武がなぎなたのさきにかかりておちぬ。(中略) 城をまきて秋より冬にをよびぬ。(中略) 城中飢にのぞみて、先下女小童部にど城戸をひらきて出来る。軍兵共みな道をあけてこれを通しやる。是を見てよろこびて、又おほくむろがりくだる。(後略)

『奥州後三年記』下

藤原の資道は將軍のことに身したしき郎等なり。年わづかに十三にして將ぐんの陣中にあり。よるひる身をはなる事なし。夜半ばかりに將ぐん資道をおこしていふやう、武ひら家ひらこん夜落べし。ここへたる軍どもをのをのすへしたるかり屋どもに火をつけて手をあぶるべしといふ。資みちこのよしを奉行す。人あやしく思へども、將軍のをきてのままに、かりやどもに火をつけて、をのをの手をあぶるに、まことにそのあかつきなんおちけり。(中略) 寛治五年十一月十四日の夜、つみに落をはりぬ。城中の家どもみな火をつけつ。(中略) 武衡にげて城のうちに池ありけるに飛入て、水にしづみてかほを叢にかくしてをる。つはものども入みだれてこれをもとむ。つみに見つけて池よりひきいだして

いけどりつ。(中略)次に千住丸をめし出して先日矢倉の上にていひし事、ただ今申てんやといふ。千住かうべをたれてものいはず。(後略)

『康富記』文安1年(1444)6月25日条:「後三年絵」の内容

(前略)此後家衡打越伯父武衡館相談此事、武衡申云、大守者天下之名将也、已得勝軍之名、非高運乎、可楯籠金沢城之由誘也、武衡同所籠入也、大守又攻此城、(中略)家衡之勇兵トト大守之勇兵トト一人充出逢、決雌雄事等此時也、此勝負時、大勢出城中有大合戦、後焼破金沢城、武衡引出城中、池底被切首、武衡之郎従平千住又生虜ニシテ、依悪口之咎、先拔舌、(中略)後[ ]此金沢城ヨリ軍敗サル以前ニ落行小児・尼女、不謂老少、悉於城麓殺害了(城早落計歟)、此事秀武所申大守也、(後略)

※「家」と「池」を包接して「矢倉」をもつ「城」を高き山「岸」に圍繞された地形に構築

- ・陸路と通じた「城戸」の設置:「城麓」の交通路との遮断
- ・遠方の敵には「矢」を射て、接近してきた敵には「石弓」を外して攻撃
- ・兵や武士=弓射騎兵の従者(亀次ら)に「長刀」をもつ歩兵たち→一騎打ちの特殊性  
参考:『保元物語』上「新院御所各門々固メノ事 付ケタリ軍評定ノ事」源為朝の従者如影昼夜朝夕付随者ハセウセウ有ケリ。乳母子ノ箭前掃ノ須藤九郎家季、其兄ニ、山法師ノ還俗したるアキマカゾエノ悪七別当、打手ノ城八、手取ノ余次三郎、三町ツブテノ紀平次、トメヤノ源太・左仲二、大矢ノ新三郎・同四郎・霞五郎・吉田太郎・兵衛太郎ヲ初トシテ、廿八騎ゾ候ケル。
- ・最終的には焼討戦術も踏襲されている

後三年合戦における源義家の軍事編成 [森 2022]

陸奥守源義家——A 館ノ者共 (館侍) …子弟・郎等

| | 弟義光一郎等…腰瀧口季方

| | 京から随行した郎等…大宅光房〔駿河国〕、兵藤正経〔三河国〕ら

| | 坂東之精兵…鎌倉景正、三浦為次〔相模国〕

| —B 国ノ兵共

———— C 独立した武力を有する武者

吉彦秀武…県小次郎次任——舍人鬼武

清原清衡…藤原重宗 (秀郷流藤原氏カ)

むすびにかえて

延慶本『平家物語』に描かれる12世紀を通じた戦闘形態の変化:

「昔」は馬を射ず→「中比ヨリ」は騎兵の馬を射るか馬当てで徒歩立ちにさせる

→「近代」は大刀・腰刀を用いた組打ちを重視 ⇒平安後期東北での戦闘の影響は?

引用文献（必要最小限にとどめた）

石井 進『中世武士団』（小学館，1965年）。

入間田宣夫・八重樫忠郎・樋口知志「対談 前九年・後三年合戦を考える」（入間田宣夫・坂井秀弥編『前九年・後三年合戦』高志書院，2011年）。

大平 聡「堀の系譜」（佐藤信・五味文彦編『城と館を掘る・読む』山川出版社，1994年）。

岡陽一郎「後三年合戦の堀と柵」（入間田宣夫・坂井秀弥編『前九年・後三年合戦』高志書院，2011年）。

川合 康『源平合戦の虚像を剥ぐ』（講談社メチエ，1996年）。

川合 康『鎌倉幕府成立史の研究』（校倉書房，2004年）。

川尻秋生『将門の乱』（吉川弘文館，2007年）。

近藤好和『騎兵と歩兵の中世史』（吉川弘文館，2005年）。

近藤好和「武器・武具と兵」（川尻秋生編『将門記を読む』吉川弘文館，2009年）。

島田祐悦「清原氏」（樋口知志編『安倍・清原氏の巨大城柵』吉川弘文館，2022年）。

関 幸彦『東北の争乱と奥州合戦』（吉川弘文館，2006年）。

高橋一樹「城氏の権力構造と越後・南奥羽」（柳原敏昭・飯村均編『御館の時代』高志書院，2007年）。

高橋典幸他編『日本軍事史』（吉川弘文館，2006年）。

高橋秀樹『三浦一族の研究』（吉川弘文館，2016年）。

水澤幸一『奥山荘城館遺跡』（同成社，2006年）。

福田豊彦編『いくさ』（吉川弘文館，1993年）。

中澤克昭「空間としての城郭とその構造」（『中世の武力と城郭』吉川弘文館，1999年）。

中澤克昭「金沢柵の立地と構造を巡って」（『平成三〇年度後三年合戦シンポジウム資料集』横手市教育委員会）。

樋口知志『前九年・後三年合戦と奥州藤原氏』（高志書院，2011年）。

森 公章「前九年・後三年合戦と武力—河内源氏と地域権力の諸相—」（『東洋大学文学部紀要史学科篇』47号，2022年）。

森 公章「余五將軍平維茂の軌跡」（『東洋大学大学院紀要』54号，2017年）。

文学テキスト・古記録・絵巻物

塙保己一編『群書類従』第二十輯合戦部（続群書類従完成会，1959年）。

増補史料大成刊行会編『増補史料大成 康富記』（臨川書店，1965年）。

黒板勝美編『新訂増補国史大系 吾妻鏡』第一（吉川弘文館，1974年）。

小松茂美編『日本の絵巻 後三年合戦絵巻』（中央公論社，1988年）。

栃木孝惟他校注『新日本古典文学大系 保元物語 平治物語 承久記』（岩波書店，1992年）。

小松茂美編『続日本の絵巻 前九年合戦絵巻 平治物語絵巻 結城合戦絵巻』（中央公論社，1992年）。

池上洵一編『今昔物語集』本朝部（中）（岩波書店，2001年）。

梶原正昭校注『陸奥話記』（現代思潮新社，2006年）。